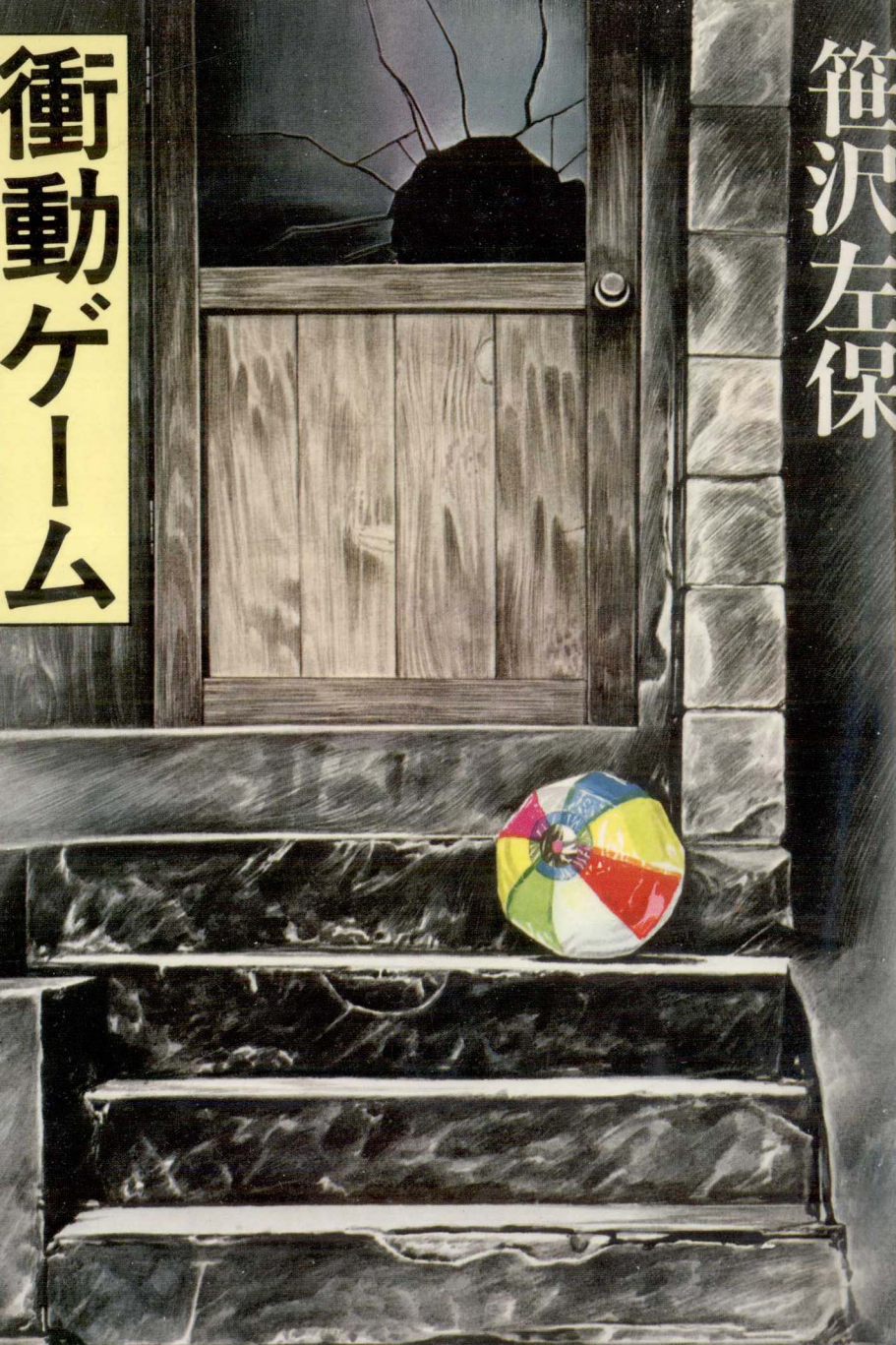
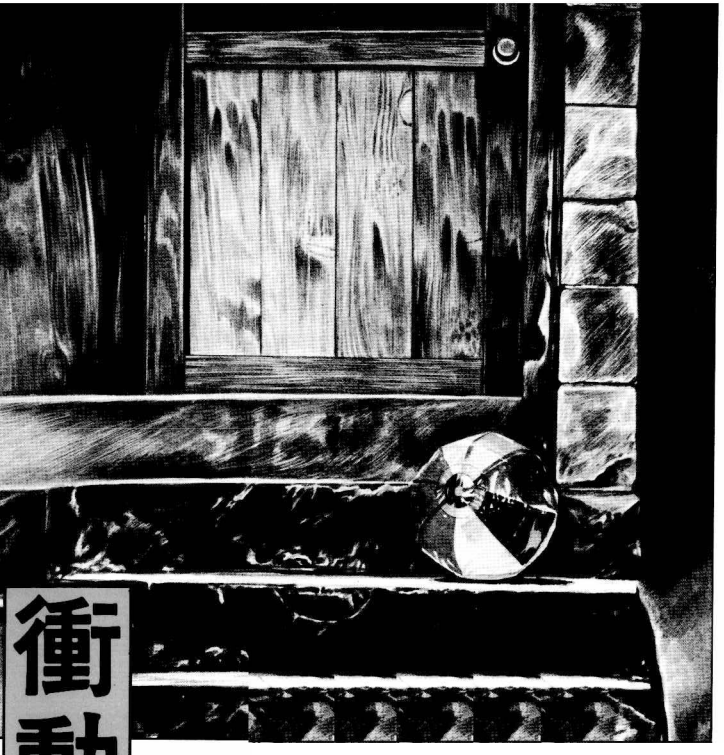
衝動ゲーム

笹沢左保





衝動ゲーム

笹沢左保

衝動ゲーム　九八〇円

第1刷発行　昭和54年5月30日

著　者　笹沢左保
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
〒112　東京都文京区音羽2―12―21
電話　東京(03)945―1111(大代表)
振替　東京8―3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
©1979 SAHO SASAZAWA Printed in Japan

0093-306193-2253（0）　(文2)

衝動ゲーム　目次

とっても殺意　5
とことん心中　53
ごきげん凶器　99
ぱっちり視線　147
こんなに愛情　195
うんざり血痕　241

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

衝動ゲーム

装幀　福田隆義

とっても殺意

1

一種の予感ってものかもしれない。目で確かめる必要もないし、おれにしたって意識的にその幕あきを待っているわけじゃないんだ。

静寂というのかな。いや、もともと静かなんだ。夜中の十二時をすぎているんだし、このあたりは邸宅とマンションしかない住宅街だから……。特に静寂を感ずるなんて、そんなことがあるはずはない。

しかし、一瞬その静寂みたいな、ひんやりしたものがおれの肌に触れるんだ。とたんに、おれの目は北側の窓へ走る。すると、ちゃんとその光景が、幕あきよろしく展開しているってわけなんだ。

やっぱり、予感だな。テレパシーってものかもしれない。時間は、確かに一定している。女の部屋に電気がつくのは、十二時半から午前一時までの間なんだ。だから、予感とかテレパシーとかではなくて、やっぱりおれのほうが無意識のうちに幕あきを待っているってことになるのかもしれないな。

おれはもちろん、女の名前を知らない。おれは勝手に、Y子という名前を付けているんだ。Y子の意味はまず、淫猥、猥談なんかの『猥』に通じている。それから女の裸体を表わす記号、WXYの『Y』の部分を意味しているんだ。

また、始めやがった――。

おれは舌打ちをしながら、鉛筆を投げ出しノートを押しやる。それから椅子をやや窓のほうへずらして、見物の体勢を整えるわけだ。Y子というナオンも、いささか変わっているみたいだ。

窓のカーテンを、開きっぱなしにしておく。しかも、電気を消さない。完全に眠るときになって、初めてカーテンを引いて電気を消すんだ。それでいて昼間は、カーテンをあけるってことを絶対にしない。

夜、電気をつけてカーテンを開きっぱなしにしておけば、まるでスクリーンに映写されるみたいに、外からまる見えだってことぐらいは、子どもにもわかるはずだ。それなのにY子は、まるで頓着しないんだからな。

それで最初のうち、おれに見られているのは承知の上、わざわざおれに見せつけているんじゃないかって、疑っちゃったよ。でも、よく考えてみると、そういう設定が成り立つはずはないんだ。

マンションは、おれの家の北側に建っている。裏庭へ回る通路とコンクリートの塀を隔てて、すぐ隣の敷地にある四階建のマンションなんだ。そのマンションの二階の左側の部屋に、Y子は住んでいる。

おれの部屋は、三階にある。おれの家は豪邸などと呼ばれているが、コンクリート造りの二階建てで一部が三階になっている。三階には二部屋しかなくて、六畳の納戸のほかに八畳の洋間がある。

その八畳の洋間は、まあ予備室ってところで、殆ど使われることがなかったんだ。おれの部屋も九ヵ月前までは、弟の部屋と並んで二階にあった。ところが去年の三月になって、三階の予備室へ移るようにと、命令が下ったんだ。

「三階のあの部屋は、別世界だわよ。何もかも忘れて、勉強に没頭できるわ」

ヨシ子が、そう言いやがったのさ。つまり、おれを三階の孤立した部屋へ、隔離しようってことなんだ。おれは、黙っていた。返事をしないというのが、おれにとっては精いっぱいの抵抗の姿なんで

ね。

「公一さん、あなたは高校三年になったんですよ。これからの一年たらず、あなたの生活のすべては受験のためにあるんです。わかっているわね」

ヨシ子は、おれを睨みつけやがった。

「はい、わかっています」

おれは、屈服せざるを得なかった。

そうした経緯から、おれは三階の部屋へ移ったのさ。部屋へはステレオもラジオも、持ち込むことを許されなかった。殺風景な勉強部屋で、心を和ませてくれるものと言えば、ベッドぐらいなものだった。

おれは、この部屋を『孤島』、『刑務所』と呼んだよ。まさに、その通りだもん。しかし、間もなくおれはこの部屋が、違う意味での別世界だってことに気づいたんだ。隣のマンションの二階の左側の部屋が、ここからよく見えるってことを知ったのさ。

Y子の部屋は、おれの部屋から見おろす位置にある。Y子の部屋からは、おれの部屋の中を見ることができない。大きな松の木が枝を広げているし、おれにしても特定の場所に顔を置かないとY子の部屋を覗けないくらいなんだ。

むしろ、マンションの三階と四階の部屋から、逆におれの部屋が覗かれるという心配がある。それでおれは北側の窓のカーテンを、いつも引いておくようにしていた。南向きの窓が大きいので、採光は十分すぎるほどなんだ。

夜の十一時をすぎた頃になって、おれは北側の窓のカーテンをあける。その時間になると、マンションの三階と四階の四つの部屋の窓は、完全に暗くなっている。そして間もなく、二階のY子の部屋だけが明るくなるってわけなのさ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

Y子の職業は、未だにわかっていない。調べようって気にはならないが、見当ぐらいならつけられないこともない。Y子は毎朝八時に、マンションを出て行く。

一度、南側の窓から路上を行くY子の姿を見かけたことがあるが、どこにでもいそうなOLという感じだった。Y子は、勤めに出ているのだ。小さな会社の受付嬢か、社長秘書じゃないかと、おれは思っている。

だけど、夕方に帰宅するということが、Y子の場合ないみたいなんだ。Y子が部屋に帰りつくのは、夜の十二時半から午前一時までの間に決まっている。但し、日曜と祭日、それに土曜日の夜は、部屋にいるんだな。

つまり、Y子が勤めている会社は、まだ週休二日制を採用していないんだ。そしてY子は夜もどこかに勤めていて、その勤め先は土曜日と日曜日が休みだってことになるんだよ。

Y子は夜、バーかスナックで働いているのに違いない。高級とまではゆかないが、一応マンション暮らしをしているんだ。生活もそれなりに、派手になるだろう。OLの給料では、とてもやってはゆけないはずだ。

あるいは、老いたる郷里の親なりに、送金の義務を負わされているのかもしれない。とにかくY子は、昼も夜も働いているんだ。その点は大いに感心もするが、だからと言ってY子が真面目な女だということにはならないんだぜ。

彼女、アルコールがはいると、好色な淫乱女になるらしい。男を連れて部屋へ帰って来るときは、必ず酔っているんだ。大きな口をあけてよく笑うし、身体を妙にクネクネさせるので、酔っているってすぐにわかるんだよ。

Y子は平均して、週に二回は酔って帰宅する。それは、週に二回は男と一緒に帰って来るってことを意味するんだ。Y子は相当、積極的みたいだね。酔っているせいもあるんだろうけど、Y子は奔放

にみずから男に挑みかかるのさ。
カーテンを、開いたままなんだ。Y子は窓の外から視線がはいって来ているなんて、夢にも思っていないらしい。覗かれる心配はないと、決め込んでいるんだ。
おれの部屋の電気は消えているし、スタンドの明かりが天井に反射する程度だろう。松の木という目隠しもあるので、Y子の部屋からは隣家の三階の窓が暗くなっているように見えるのかもしれない。
ましてや夜中まで、その部屋に起きている人間がいるなんて、想像も及ばないんだろう。当然、Y子は隣家の高校三年の長男が、受験地獄の生贄(いけにえ)として深夜まで苦行を続けているなんてことは、知らずにいるのである。
ひとりで帰って来たときは、まず全裸になる。それから、浴室の中に消える。再びおれの視界に戻って来るときのY子は、湯上がりの裸身にバス・タオルを巻きつけているんだ。
Y子は、二十三、四だろうと思う。肌が綺麗だ。電気の光線に映(は)えて、白く輝いて見えることもある。全身にクリームを塗って、それを肌にすり込むように両手でこする。さまざまのポーズをとり、まるで白い彫像のように美しい。
男が一緒のときは、全身マッサージが更に丹念になるんだ。男はベッドに横になって、Y子の裸身をじっくりと見せつけられることになる。そうしながらY子と男は絶えず何やら言葉を交わしたり、笑ったりしているんだ。
その表情から察して、かなり淫らな言葉を口にしているようである。そのあとY子は、ベッドにはいる。Y子ひとりであれば、ベッドにはいる前に電気を消す。だが、男が一緒のときは、電気をつけたままなんだ。
一ラウンドが終わったあと、Y子は必ずベッドから抜け出して姿を消す。トイレへ行くのに違いない。そうでなければ、浴室なんだろう。もちろん、セックスの跡始末をするためさ。

冬休みにはいる直前、おれは何気なく高倉久美子たちが女子のトイレの入口近くで喋っていることを、耳にしてしまった。ああいう同級の女子の話を学校で耳にしたのは初めてだったので、おれは強烈なショックを受けたものだった。

「ビデよ」

「使っているの」

「うん」

「持ち歩いているの？」

「学校以外ではね」

「避妊に、効果があるのかしら」

「避妊そのものには、駄目でしょうね。避妊薬を使ったあとの洗浄に、ビデが役立つんだもの」

「あとは、タンポンを使ったあとなんかに、いいんでしょ」

「そう。ビデは、清潔にしておくために使うんだからね」

「処女膜を、傷つけたりしないかしら」

「大丈夫よ」

「本当？」

「わたしがビデを使い始めたのは、バージンではなくなってからだけどね」

「わあ、凄い」

「わたしは、駄目だわ」

「どうしてよ」

「そんなものを挿入したりしたら、マスターベーションやりたくなっちゃうもの」

「いやだわ」

「値段、幾らぐらいなのよ」
「いま、わたしが使っているのは、三千円だわ」
「安いものなのね」
Y子もトイレか浴室へ行って、そのビデってやつで洗浄するのに違いない。間もなくY子は戻って来て、電気を消してから男を押しやるようにしてベッドへはいる。Y子の部屋は真暗になり、オヤスミナサイである。
おれはいつも、ベッドでY子が男の愛撫を受け始めるところまでしか、見物しないことにしている。Y子が両腕を左右に投げ出して、口をパクパクさせながらのけぞり、身悶えを始めると、おれは窓の外へ向けていた視線を室内に戻してしまう。
それから先を見物したのは、最初のうちの何回かだけだったな。そうしていると頭が痛くなるってことに、おれは気がついたんだ。どうして頭が痛くなるのか、おれにはよくわからない。
ひとりでいて、その美しい裸体を見せつけるときのY子と、別人になってしまうことは確かだよ。男の愛撫を受けたり、ドッキングしたりのY子は、まるで美しくない。狂った獣みたいで、極端に醜くなる。
女のそうした対照的な二面性が、腹立たしくなるくらいなんだ。おれは頭が痛くなり、吐き気を催してしまう。勉強の妨げになること夥しく、よっておれは前戯と本番の光景を見ないのである。
だからと言って、勉強に打ち込む気にはなれない。そこで、おれはベッドの蔭に隠してあるモデル・シップを、机の上に運ぶことになる。製作途中のモデル・シップを隠さなければならないのは、ヨシ子に見つかったら大目玉を喰らうことになるからだ。
全長八十センチの帆船である。製作にとりかかってから、すでに半年がすぎている。毎晩は製作を続行できないし、作業時間も一晩に三十分程度と限られているんだから、仕方ないだろうよ。

それでももう、九分通り完成しているんだ。船体、甲板、フォア・マスト、メーン・マスト、ミズン・マストと、それに付属するすべての部品の取り付けが終わっている。残すはバウスプリットと、船首の部分だけなんだ。

おれは工作用機具の箱を取り出して、三十分ほどモデル・シップの製作に熱中する。このモデル・シップの存在を知る者は、おれのほかにお手伝いの箱田澄江さんしかいないんだ。

箱田さんはこの部屋を掃除するから当然、モデル・シップの存在に気がつくはずさ。でも、箱田さんはそのことを、誰にも喋らないでいてくれる。

箱田さんは、もう五年近く、お手伝いとしておれの家にいる。二十二のとき九州の宮崎県から、おれの家に来た箱田さんだが、その箱田さんも二十七になったわけだ。

ベッドの蔭に隠匿してあるモデル・シップを見て、箱田さんはその存在を秘密にしておかなければならないのだと、察してくれたらしい。箱田さんはヨシ子の性格をよく知っているし、おれの気持もわかっていてくれるんだ。

三十分がすぎた。

おれはもう一度、Y子の部屋の窓へ目をやった。Y子が乱れた髪の毛を掻き上げながら、ベッドを抜け出したところだった。全裸のままY子は、やや腰を引くようにして、よろよろ歩いて行く。

トイレか浴室でビデを使ったのに違いないY子は、すぐに戻って来て陶然とした顔で深呼吸を繰り返し、ぐったりと壁に凭れかかった。Y子の手が、ゆっくりスイッチへ伸びてゆく。電気が消えた。

オヤスミナサイ。

おれは、苦笑した。自嘲の笑いだよ。さて、午前三時まで勉学にいそしむぞ。おれはモデル・シップをベッドの蔭に運び、工作用機具の箱を片付けた。ポットの中身を、コーヒー茶碗に注ぐ。

Y子は、男に抱かれて眠っている。

ヨシ子も、男の夢でも見ながら熟睡していることだろう。
箱田さんも、眠っている。
世間だって、眠っているんだ。
孤独な人間だけが、こうして起きているんだ。暖房はもう、とめてあるんだろう。余熱が残り少なくなったせいか、寒くなって来た。だが、睡魔と戦うためには、寒いほうがいいんだぜ。
「箱田さん、結婚しないのかな」
おれは、声に出して呟いた。どうしておれは、突拍子もなく妙なことを考えたりするんだろう。いまのおれには、何もかも関係ない。

2

あいつは、馬鹿だよ。
おい、ヨシ子、お前の魂胆はわかっているぜ——と、大声で言ってやりたかった。ところがヨシ子は、おれに胸のうちを見透かされているなんて、夢にも思っちゃいないんだ。甘いというか、自分の肉親を舐めきっているというか。
いや、そうじゃないのかもしれない。ヨシ子は、狂っているのと違うだろうか。つまり若いツバメってやつに、もう無我夢中になっているんだ。恥も外聞もないって、間もなくそこまでいっちゃうんじゃないのかな。
古風な表現を用いれば、若い男に血道を上げるってことになる。
恋は盲目。
色狂い。
三十女の愛欲地獄。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.